

別所真紀子詩集評（昭和六十二年十月 山陰中央新報 読書欄掲載）

『アケボノ象は雪をみたか』

喪失した風土を埋める

洲 浜 昌 三

この詩集の著者、別所真紀子さんは、大田市富山の生まれである。旧姓は細貝。家は旧家だったらしいが、今はないという。その間の経緯は知らない。恐らく時代の荒い波風を受けてそうなったに違いない。昭和二十九年、二十歳のとき上京、今は小平市に住んでいる詩人である。

詩だけではなく、小説や評論も書ける人で、『新潮』の新人賞、『婦人公論』の女流文学新人賞、中央大学百周年記念論文「長谷川如是閑」賞にも入選した実績のある人である。

この詩集の「あとがき」に次の一節がある。

「じぶんの精神形成に、風土というものが深く根ざしていることに気付いたのは前詩集『しなやかな日常』を編む作業のさなかにであった。次のテーマとして自らの風土性を掘り起こしてみよう、と思い定めたとき、私は逆に、じぶんの風土性の喪失感にいきあたってしまった」

風土は意識の問題である。地理や気候など自然的な環境だけではなく、歴史や文化や人間関係も深く関わってくる。しかし過去も現在も客観的に厳然と存在しているのは、この詩人が育った石見の自然や風物である。詩

人はそれを手掛かりとし、起爆剤としてイメージを広げ、喪失した内面の「風土」を埋めようとする。その素材は、「土蔵の明かり採り窗」^{まど}だったり、「白い硅砂の波打際」であったり、「水の宇宙の円筒を測って一周を測っている黄金（きん）いろ尺取虫」、「ついにその名を呼ばなかった川」、「風の谷」。「いちにち青空を反芻する黒い牡牛」、「ちちははたちを彼岸へ送り届けた赤い曼珠沙華の灯火」「千年杉の鬱屈した根」「サルトリイバラの赤い実」などであったりする。

選ばれたこれらの素材から石見の風土のイメージや風がかすかに立ちあがってくる。その濃度は著者の予想を超えているかもしれない。

作者は記憶に残った素材を手掛かりに、失われたものを豊かなイメージとレトリックで創造し、再生しようとする。

この詩集に寄稿文を寄せた伊藤桂一氏の言葉で置き換えれば、「幻想の中のととの村に、よりよき位置をもって、住みつきたい願望に、きわめて激しい思いを焚（た）きつづけている」ともいえるだろう。

それを引き寄せる緊張感と、創造過程に求められる知的燃焼を経て、二十一編の詩が生み出されたのである。それはこの詩人の力量を証明しているといえるだろう。

面白いことに一連の詩の中で、「自然」は色彩にあふれ花火のように鮮明で多彩な光を放ち、起伏の多い山谷から明るい天まで透明感のあるイメ

ージが深く遠く広がる。詩の中で、自然は個性豊で色彩にあふれている。

ところが「人間」は死者だったり、亡霊だったり、老婆だったり、「何かを通り過ぎるのを聴いている」少女だったりする。

ここに、この詩人の「原風景」があることは確かである。それを「石見の風土」と呼ぶかどうかは別の問題である。

作者の脳裏には、ふるさとの自然は豊かに息づいている。しかしそこは同時に大切な人（兄や親族、両親）や生家を失った喪失の場でもあるのだ。

詩集の扉には小さい活字で「父 善之助 母 邦の靈にー」と書かれている。太古の昔、雪の中で埋もれて化石となったアケボノ象のように、詩人は父と母を豊かな石見の自然の中に埋葬したかったのかもしれない。

花は花に、詩は詩自体に語らしめなければいけない。

豊かなイメージにあふれたこの詩集を手にして、さらに深いものを汲み取っていただければ幸せである、

（日本詩人クラブ会員・洲首昌三）

（皆美社、B6判、九三ページ二五〇〇円）

（この詩集評は昭和六二年秋、山陰中央新報の読書欄に、ある詩人から依頼されて寄稿したものです。字数が限られていましたので、説明不足や省略、飛躍も目につきます。今回少し字句や表現を修正し箇所があります）